かながわと世界をつなぐ

KIF NEWS

2012.9
No. 30
(公財)かながわ国際交流財団
Kanagawa International Foundation

ケイアイエフ　ニュース

多文化の中の子どもたち

多様な文化的背景を持つ子どもたちが抱える課題は多岐に渡り、複雑化し、単に目に見える課題を解決していくだけでは不十分であると言われています。そこで、今回は、子どもをめぐる課題を考える際に、周りにいる大人たちがどのような点について留意する必要があるのか改めて考えてみたいと思います。

■多文化の中の子どもは今～子どもをめぐる課題に向き合う
池上摩希子さん（早稲田大学教授）に聞く……2
フォーラム「外国につながる子どもがホッとする授業づくり」……3
「どの子も豊かに育つ授業づくり」～フォーラム基調講演から～中山京子さん(帝京大学准教授)……3～4
外国につながる神奈川の子どもについてもっと知りたい人のために……4
■多文化共生社会における防災を考える！
かながわ国際交流財団が取り組む災害時の外国人住民支援……5
報告：シンポジウム＆視察『伝える・支える・立ち上げる…未来に繋げ、私たちの経験』に参加して……5

KIF INFORMATION & REPORT

かながわ国際交流財団の事業から……6
神奈川国際学生会館だより　留学生の日常……7
県内NEWS～秋はイベント目白押し～神奈川県内の国際交流・多文化共生イベントご紹介します！……7

KIF INFORMATION

かながわ国際交流財団へのご寄付のお願い……8

多文化の中の子どもは今 ～子どもをめぐる課題に向き合う～

池上摩希子さんに聞く

2011年8月に文部科学省が行った調査によると、全国の公立小・中・高等学校等に在籍する日本語指導が必要な外国人児童生徒は、28,511人となっています。そのうち神奈川県内では2,990人の子どもたちが「日本語指導が必要」とされ、その数は愛知県（5,623人）に次いで全国第2位となっています。

神奈川県では学校に日本語指導が必要な子どもが5人以上在籍する場合の国際教室の設置や、日本語指導員の派遣、高校入試での外国人特別枠などの制度が整備されてきました。また、NGO/NPOの活動や自治体との連携も活発です。

しかしながら日本で学び、日本社会に巣立っていく外国につながる子どもを取り巻く教育環境には、まだ多くの取り組むべき課題があります。

年少者日本語教育がご専門の池上先生に「言語」という切り口から見た外国につながる子どもの現状と今後についてお話を伺いました。

池上　摩希子氏
（早稲田大学教授）

国立国語研究所での日本語教育研修を経て、1985年より（財）中国残留孤児援護基金中国帰国者定着促進センター教務課に日本語講師として勤務。2005年より現職。

■多様化する外国につながる子どもたち

1990年代から、国境を越えて行き来する人々が急速に増え、日本の学校で学ぶ外国につながる子どもたちはますます増加する傾向にあります。子どもたちがつながる国・地域も様々で、来日の背景、事情も多岐にわたり、課題も複雑化しているのが現状です。もちろん以前から指摘されている課題も残っていますが、それらが更に複合化しています。子どもを巡る社会環境の変化のスピードに、制度上の対応が追いついていないのが現状ではないでしょうか。

来日したばかりの子どもに対して日本語指導が必要、というのは分かりやすいです。子ども自身も何とかしなければと思うし、周りの人たちもどうにか支えようとします。ですので、以前に比べると指導体制も整いつつあり、初期の指導は充実してきているといえるでしょう。

しかし、子どもたちが抱えさせられている別の課題も目立つようになってきました。

■「学習言語」の能力

その一つは、日本生まれや幼くして来日した子どもたちの中に、日常生活での意思伝達は何とかなっても、学校での学習に参加できていない子どもたちがいるということです。こうした子どもたちは、一見、日本語で流暢に話すことができます。しかし、ある言語を話せるようになるということは、どんな内容をどのような場面でどのように話せるのか、といった状況や条件を勘案して考えなくてはなりません。

学習に参加するための言語の力といったとき、読み書きはもちろん大切ですが、それだけを指すわけではないのです。この能力は「話す」「聞く」場面で発揮する必要がある能力でもあります。「学習言語」の力が十分でないと、抽象的な説明が理解できない、調べ学習・グループ学習などで意見を述べたり聞いたりができない、などということが起こります。すると、学習活動への参加が十分にできなくなり、結果として学力が低下してしまうことにもつながります。

この「学習言語」の問題は外国につながる子どもだけの問題ではありません。例えば、家庭の中で「豊かな」コミュニケーションが図れていないとか、非常に限定された関係の相手としかコミュニケーションを取る機会がないような環境であれば、日本人の子どもも同じような状況に陥ってしまいます。外国につながる子どもの場合、上記に加えて、日本語に触れる接点や時間が少ないなど言語を獲得するための環境に恵まれないことが多く、そのような傾向に陥りやすいといえます。外国につながる子どものこうした実情が考慮されず、表面上は「問題なく」話せるように見えるがために、必要なサポートから最初から外されてしまうということが今でもあるのではないでしょうか。

■母語及び母文化の保持

「母語の保持」についても注意深く考える必要があります。子どもは日本語がうまくなったけれど、親はまだまだ、ということがあります。親子の間に共通言語がなくなり、意思疎通がうまくいかなくなるという問題は以前から指摘されています。

家庭内では母語を使っていてもその言語コミュニティとの接点を他にもっていない子どももいます。母語を学習する機会も保障されていないとしたら、その言語を学習させるのは、子どもにとって強要に近いことになってしまうのではないでしょうか。

母語の学習には動機が大切です。親と話せる、出身国に住むおばあちゃんと話せる、となれば、純粋に嬉しいでしょう。親と一緒に里帰りした時にいい経験ができれば、母語・母文化とのつながりを肯定的に捉えられるでしょう。日本人の友達に「すごいね」と言われれば自信にもつながります。

日本語だけでなく、学校では英語も勉強しなければならない、忙しい子どもたち。その中で本人が母語を学びたいと思えるような、母語や母文化を肯定できる環境づくりが大切だと思います。

■これからのビジョン

外国人の定住化が進む中、私たちはどのような社会を目指すべきなのでしょうか。

今は、日本語が「日本人並みに」できないときちんと生活できない社会になっているのではないかと思います。日本語が少しぐらいできなくても、市民として必要なサポートが受けられ、市民として参加できる社会づくりを目指すことが大切なのだと思います。しかし、不自由なく生活できるようになるために、日本語を勉強しましょう、と考える人が多いような印象を受けます。

日本語習得が前提ならば学習機会を保障していく仕組みづくりが必要です。私としては、「多文化共生」社会を目指すのであれば、そこまで日本語学習を「強制」していく必要はないと考えていますが、どうでしょうか。どちらにしても、明確な目標を定め、達成のための制度構築を考えていく必要があります。

日本の場合、国としての外国人施策がまだはっきりしていません。その中で、本来なら公的機関が担うべき役割をNGO/NPO やボランティアが肩代わりしているのが現状です。しかし、単なる対症療法ではない対応をするためには、きちんと仕事を作り出し、身分保障もしていかなくてはなりません。

いろいろな分野で活躍する、外国につながる若者も増えてきています。社会全体がボーダレスになってきている中で、どのようなビジョンを持つべきなのか、私たち全員に与えられた課題だと思います。

フォーラム「外国につながる子どもがホッとする授業づくり」

6月23日に、当財団が主催し、フォーラム「外国につながる子どもがホッとする授業づくり」を開催しました。

このフォーラムは「外国につながり」のある子どもの中でも、神奈川県で増加している日本生まれの子どもたちが、自分自身や自分が関係している国について肯定的に捉え、教科学習に前向きに取り組んでいく環境をいかに作っていけるのか、事例報告なども入れながら考えるために企画されました。

当日は約100名を超える参加者があり、帝京大学准教授の中山京子さんから、小学校の生活科や社会科の教科書から多文化につながる素材に触れながら、様々な「個性」をもつ子どもたちが安心できる、まさに「ホッとする」ために配慮すべき点についてご自身の経験を踏まえて講演していただきました。

引き続き小学校の事例として、静岡県浜松市の瑞穂小学校の高畠美保さんからは「子どもたちが生き生きと活動する指導の工夫」と題して、瑞穂小の外国につながる子どもの支援体制や、国語の指導の実践例の紹介がありました。

神奈川県立相模原清陵高校の高橋清樹さんからは「基礎学力定着のためのスモールステップ」として、算数・数学指導のコツなどについて、アイデアの提供がありました。子どもの理解できていないところ、つまずいている点を発見し、それを克服していくためのわかりやすい指導例などの報告がありました。

その後は、基調講演の講師である中山京子さん、事例報告の高畠美保さん、高橋清樹さんがパネラーとなり、授業内でのサポートだけでなく、その子どもが自立した大人になるためにどのような支援ができるか、最後まで活発な議論が続きました。

「どの子も豊かに育つ授業づくり」～フォーラム基調講演から～ 中山京子さん（帝京大学准教授）

当財団が発行した『外国につながる子どもがホッとする授業づくり』の執筆者でもあり、教科書なども執筆していらっしゃる中山京子さんから、身近な素材を使った授業づくりについて具体的な提案、心構えなどを中心に基調講演をしていただきました。

■はじめに

2011年度から全面実施された新学習指導要領では、日本の伝統・文化を取り上げることが加えられました。カルタや百人一首などの遊びも積極的に学習活動に取り入れることとされ、社会科の授業でも郷土カルタづくりなどの活動も行なう学校が増えました。しかし、日本語を勉強中の外国につながる子どもにとって、5・7・5のリズムで言葉が省かれ、順序が逆転しているカルタは、馴染みにくいものです。日本語の授業で習う言い回しと異なるので困ってしまう子どももいるでしょう。

先生方には、このような場面が起こりえることを意識してほしいと思います。その一方で生活科や社会科の授業は、外国につながる子どもたちがホッとする機会を与えてくれる材料に満ちている教科です。

■教科書の挿絵から ～身の回りの多様性に気づく～

日本に様々な国・地域から移り住む人々が増え、定住化が進んでいます。そのような変化を教科書はどのように反映しているでしょうか。小学校1・2年生が使用する生活科の教科書の挿絵を見てみましょう。町の風景を表す挿絵には障がいのある方や赤ちゃんをつれたお母さん、お年寄りと並んで、髪や肌の色が多様な人々も載っています。さりげなく埋め込まれた「多様性」から、実際に身の回りに色々な人がいることを理解するきっかけになります。

教科書の挿絵は、学校のまわりの様子を知る、季節の移り変わりを知るなどの目的に沿って描かれていますが、子どもたちの気づきを進めるために、ぜひ色々な視点を意図的に教科書から拾ってみてください。例えば、英語・中国語・ハングルで表記された切符売り場の写真が載っています。ベビーカーを押している外国の母親の姿からも外国人が生活者として地域に暮らしているということが分かります。うちの学校はどうだろう、学校の中の多文化にも目を向けるというように視点を拡げることができるでしょう。

クラスにいる外国につながる子どもがホッとし、安心できるヒントは、教科書の中に意外に多く隠されています。

■子どもの気持ちに寄り添う

外国に関係する学習は6年生の社会科の単元となっている「国際理解」のみだと考えている先生方が多いようです。しかし、生活・社会科の教科書を活用し、子どもたちがつながる国・地域について学ぶ機会はもっと他にもあるはずです。

例えば、5年生の産業についての授業で「外国と私たちの食のつながり」を取り上げることができます。私たちの食卓は世界とつながっていて、おかげで豊かな食生活を送ることができているのだ、とほんの少し触れるだけで嬉しく感じる子がいるのではないでしょうか。

授業で継続して取り上げる小さな取り組みの積み重ねが、外国につながる子どもたちの自尊心を育て、勉強にも前向きに取り組むことにつながっていくのだと思います。

■子どもと事前に丁寧に話そう

つながる国を先生が肯定的に取り上げることで、嬉しいと思う子がいる反面、緊張する子もいます。その子どもの個性や性格もあり、触れてほしくない子もいるでしょう。ステレオタイプと現実のギャップもあるので、丁寧な扱いが必要です。

日本育ちの子どもの場合、授業でいきなり母国のことを聞かれても戸惑ってしまうでしょう。日本でもそうであるように、どの国の文化・風習も多様です。例えば、子どもがつながる国の事を紹介しようと伝統的な家を紹介したとします。でもその子は日本生まれで、都会に住むおじいさんの家もコンクリートの家であるような場合、先生が見せる家と自分の知識・体験とのずれが生じてしまいます。

子どものつながる国を取り上げる場合、授業の前に『あなたの国のことを紹介したい』と話してみてください。納得する形で取り上げる余裕がほしいと思います。

また、教科書には「我が国」という表現がよく出てきますが、我が国＝日本ではない子どもたちもいます。日本と自分のルーツがある国どちらを取り上げるのか迷う場合もあり、ナイーブで難しい問題ですが、このような場合もぜひ子どもとよく話をしてみてください。

このような話をしていると私が新任の時にクラスにいたペルーにつながる子どものことをいつも思い出します。幼少時に来日したその子にペルーのことを教えて、とお願いしていましたが、今思うとかなりのストレスを与えていたと思います。本人ときちんと話し、タイミングを大事にすることが必要だったと痛感しています。

■“難しい”けどすばらしい

「みんな違ってみんないい」という表現がありますが、それが理想であっても実際は難しい。「みんな違って難しい」というのが現状だと思います。違うから葛藤やぶつかり合いもあります。

人種や民族、社会階層、ジェンダー、性的指向性、障がいの有無など、あらゆる文化集団に属する子どもを含むすべての人々の間に横たわる「違い」から様々な不平等や不均等が生じています。「多文化教育」はそれらを是正していくために学校や制度を作り替えていく実践であり、教育改革運動だといえます。

外国につながる子どもの支援というと、どうしてもマイノリティの子どもたちだけをターゲットにし、彼らのことだけを考えてしまう傾向がありますが、課題解決のためにはマジョリティの意識改革や姿勢を育てることがとても大切だと思います。

多文化共生の難しさ・素晴らしさを実感し、配慮できる先生方が増えることが結果として「外国につながる子どもがホッとする授業づくり・学校づくり」を実現すると私は考えています。

外国につながる神奈川の子どもについてもっと知りたい人のために…

◎『外国につながる市民の子育て支援に関わる調査研究』

NPO法人多文化共生教育ネットワークかながわ（ME-net）が、神奈川県の「かながわ子ども・子育て支援推進調査研究事業費補助金対象事業」の助成を受け、2011年11月から2012年3月にかけて、実施した調査についての報告書です。概要版は下記からダウンロードできます。
http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/p489963.html

◎『外国につながる子どもがホッとする授業づくり』

当財団では、多文化の中で暮らす外国につながる子どもがいきいきと生活を送ることができるように、まずは周りの多文化理解の環境づくりを推進していきたいと考えています。子どもたちが生活の時間で多くを過ごす学校の中で安心できるように、ブックレット『外国につながる子どもがホッとする授業づくり』を今年の3月に発行しました。

このブックレットでは、外国につながる子どもが在籍する学級担任の先生が、普段の授業の中で教科書の内容に沿って活用できるアイデアを紹介しています。外国につながる子どもがホッとする工夫は身の回りや教科書の中からも見つけることができることがわかります。

●入手方法
〈ホームページから〉
財団のホームページ「多文化共生の地域社会かながわづくり」のページからダウンロードできます。
〈郵送〉
A４サイズの書類が入る封筒に送付希望先の名前・住所を記入し、140円分（両方ご希望の場合は240円分）の切手を貼って下記住所までお送りください。また、今後の事業の参考のために、「所属」「冊子の活用方法」「外国につながる子ども支援に必要な視点」等について書いたメモを同封していただけると幸いです。
●送付先　〒221-0835横浜市神奈川区鶴屋町２-21-８第一安田ビル４階 かながわ国際交流財団・多文化共生・協働推進課宛
＊「ガイドブック希望」と封筒にお書きください。
＊冊数が限られているため、お一人一部ずつの送付になります。小中学校に対しては、複数部数の送付もできますのでご相談ください。
●問合せ　多文化共生・協働推進課　TEL: 045-620-0011

多文化共生社会における防災を考える！

東日本大震災から1年半が経過し、全国各地で防災体制や防災訓練が見直されてきています。当財団でも外国人住民向け情報発信の他、県や市町村との連携を深めて、「多文化共生社会の地域づくり」という視点から災害時の対応を検討してきました。被災地で開催されたシンポジウムの報告と併せてご紹介します。

～かながわ国際交流財団が取り組む災害時の外国人住民支援～

当財団は、神奈川県災害対策本部が設置される災害時に、神奈川県と協働して外国人住民に対し情報の提供や相談業務を行うための「神奈川県災害多言語支援センター」を財団事務所内に設置・運営する協定を今年３月に締結しました。言葉の壁がある外国人住民への被害を軽減するために、県災害対策本部から発信される情報をやさしい日本語や多言語に翻訳し、県や当財団のホームページに掲載するとともに、多言語によるメール配信サービス“INFO KANAGAWA”を通じて外国人住民へ必要な情報を届けます。また、行政窓口等への多言語による通訳支援及び外国人住民からの相談対応を行います。

このほか、市町村レベルの「災害多言語支援センター」の設置を想定した訓練と外国人住民の防災意識の啓発を図るための防災訓練を、神奈川県から委託を受けて、今年度平塚市内で実施します。県、市町村、国際交流協会等の県内の関係者が、「災害多言語支援センター」を設置する実地訓練等を行うことで、災害時に備えた情報提供の支援体制の整備や枠組みの強化をめざします。

また、この防災訓練を通して自治体・自治会・ボランティア等地域の様々な関係機関等が連携・協働して、日頃から顔の見える関係を作ることにより、災害時に誰もが安心して行動できる災害に強い地域づくりにつながっていければと考えています。

●災害時外国人住民支援のページ／神奈川県

http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f417431/

神奈川県災害対策本部が設置される災害時に「神奈川県災害多言語支援センター」で翻訳された情報を発信する他、県内自治体が作成した防災に関する多言語情報や災害時外国人住民支援に役立つツール等のリンクを集約し、10言語及びやさしい日本語で紹介しています。また、県内で実施される災害時支援の研修会や防災訓練のお知らせ等、外国人住民の防災啓発に役立つ最新情報も掲載しています。

●INFO KANAGAWA／（公財）かながわ国際交流財団

http://www.k-i-a.or.jp/shuppan/info_kanagawa.html

国や県からのお知らせや、教育、福祉、すまい、医療、防災など生活に役立つ情報を月４回程度、やさしい日本語、中国語、スペイン語、ポルトガル語、タガログ語、英語でメール配信するサービスです。

報告：シンポジウム＆視察　『伝える・支える・立ち上げる・・・未来に繋げ、私たちの経験』に参加して

2012年7月5日・6日の2日間、東日本大震災の被災地である岩手・宮城・福島の三県地域国際化協会が開催したシンポジウムと被災地視察（宮城県仙台市及び南三陸町）に参加しましたので、ご報告いたします。

■シンポジウム…ホテル法華クラブ（仙台市）

主催者から、三県それぞれの被災状況と復興支援に向けた取組みを話していただきましたが、その中で福島県国際交流協会の方からは、それまで漢字表記の「福島」が津波に伴う原発事故により、世界中から注目され「フクシマ」とカタカナ表記されるようになったとの話がありました。大震災からの復興が必要であるにも拘わらず、「福島」が現在進行形の原発問題と直面し続けなければならない沈痛さが伝わってきました。

岩手県国際交流協会では、発災直後“Twitter”や“Facebook”により自分たちの被災状況などを発信したところ、県外・海外から多くの支援を得ることができたとのことでした。一方、宮城県国際化協会では、携帯電話と車を使って個別に外国籍県民の安否確認や相談対応を行ったことの報告がありました。その際、従来から行ってきた「外国籍県民大学」事業や日本語教室で協会職員とつながっていた外国籍県民のキーパーソンを媒介として、地域の外国籍県民への支援ができたことが報告されました。また、東北地方には外国人女性が農家の「お嫁さん」として地域社会に入り、暮らしているケースが多いことから、そうした人々の中から被災地の日本人住民と一体となって復興に向けたボランティア活動を行っている事例も紹介されました。外国籍の人々が必ずしも支援される側ではなく、支援する側になり得るという認識や発災直後における外国籍の人々との「共助」や「公助」の在り方を参加者も共有することができました。

■被災地視察…宮城県南三陸町

仙台駅からバスで約２時間ほど北上した太平洋沿いにある南三陸町は、津波に町全体が飲み込まれた地域であり、鉄骨が剥き出しになった防災対策庁舎はその高さと恐ろしさを物語る象徴として、度々報道されてきました。その庁舎の前で「南三陸町語り部ガイド」の後藤一磨さんから、16メートルを超える大津波が庁舎を襲い、屋上に逃げた40人の職員の内、10人程が辛うじて生存したこと、庁舎はバブル後の財政難で海に程近い場所に建てられた経緯があること、復興計画の前提となる住民のコンセンサスは、元々、居住地域が異なる仮設住宅の住民同士では容易に得ることができないことなど、被災状況からその後のあゆみについて聞くことができました。一瞬にして襲ってくる地震や津波では誰からも助けてもらうことはできません。自分の身を自力で守る必要があること、そして、被災直後から数時間・数日間は、自分自身の体力を自分で保持していく必要があることなど、住民一人ひとりが普段から「自助」能力を高めることが社会全体の「減災」につながるということに、建造物のほとんどが土地から剥ぎ取られ、海岸線まで見渡すことのできる広い景色を眼のあたりにして、改めて気づかされることとなりました。（野呂田 純一）

KIF INFORMATION & REPORT

かながわ国際交流財団の事業から

■「世界の入口に立とう―とびだせ！高校生2012」を実施

7月22日（日）、みなとみらいのJICA横浜を会場に高校生世代向けの国際理解入門セミナーを実施しました。今回はJICA横浜との共催で、県内の高校生69名が参加しました。午前中は異文化を体験するシミュレーション・ゲーム「バファバファ」を、午後は立教大学の河野哲也先生を迎えた哲学のレクチャーとグループ・ディスカッションを行い、今回のセミナーのテーマである「ふつうって何だろう？」について、様々な視点から考え、熱く深く語り合いました。

普段何気なく使っている「ふつう」という言葉を改めて考えてみることで、視野を広げ、本質を見抜く力を高める機会となりました。ランチ交流会では、世界各国の珍しい料理を楽しみながら、海外から来ているJICA横浜の技術研修員や青年海外協力隊OB・OG達と交流しました。積極的な参加者が多く、お互いによい刺激を受けたという声が聞かれました。次回は来年３月に２泊３日のセミナーを実施する予定です。

グループ・ディスカッションの様子

■カフェ・インテグラル「中国少数民族の独自性と普遍性」参加者募集中

湘南国際村に関連する研究機関から講師を招き、その研究内容をわかりやすく伝える対話形式のセミナー。今回は中国少数民族をテーマにした、２つの講演を、気軽に質問ができる少人数のカフェ形式で行います。司会は地球環境戦略研究機関の林信濃さん（自然資源管理グループ副ディレクター）。

【講　演】

1「モソ人の母系社会が現代に問いかけるもの」金　龍哲さん（神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部長・教授）

2「チベットの基層文化：ポン教」長野泰彦さん（総合研究大学院大学副学長・理事）

開催日／2012年10月27日（土）
13：30～16:00

会　場／湘南国際村センター・１階展示室（葉山町）

参加費／800円（ケーキ・ドリンク付き）※インタビュー集『知をめぐる対話vol.２』進呈

定　員／40名（応募多数の場合、抽選）

申込み／事業名、氏名、住所、電話・FAX番号を明記の上、ファックスまたはEメールにて10月19日（金）までにお申し込みください。

申込み・問合せ：湘南国際村学術研究センター
担当:清水　Eメール：academia@kif.ac
FAX：046-858-1210
TEL：046-855-1821

昨年のカフェ・インテグラル

■かながわ国際ファンクラブ・KANAFAN交流会を開催

6月29日（金）、関内にある横浜メディアセンターにおいて、「かながわ国際ファンクラブ」の交流会が開催されました。主に留学生や海外からの技術研修員など神奈川にゆかりのある外国人の方々と、そのような方々を支える団体や企業関係者など約300名が参加しました。民族楽器の演奏やバンド演奏が会場を盛り上げ、事前に参加者から送っていただいた「神奈川県内のおすすめスポット」の中から、５作品の紹介などもありました。

また、当日はインターネット番組「横浜夢回廊」の中継放送も会場から行われ、留学生キャスターによる進行で、世界に向けて発信されました。

出身国や大学、所属団体を超えて交流する機会となったイベントは、大盛況のうちに終了しました。参加者からは「知らない人ともいろいろお話しすることができた」、「知事と話せて良かった」等々の感想が聞かれました。

かながわ国際ファンクラブは会員・サポート会員を随時募集しています。詳細は神奈川県のホームページ（http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f417340/）をご覧ください。

参加者でにぎわう会場

■民際協力基金　秋の募集を開始

かながわ民際協力基金では、開発途上国での協力活動や国内での外国籍県民への協力活動、県内の担い手を育成する活動、国内外の大規模な災害の発生に伴い実施する緊急支援活動などを行う神奈川のNGO等への資金助成を行っています。

10月から秋募集を開始します。事前のご相談もお待ちしております。詳細は当財団ホームページ（http://www.k-i-a.or.jp）「かながわ民際協力基金」のページからもご覧いただけます。

募集期間：10月1日（月）～11月30日（金）
問合せ：かながわ国際交流財団
多文化共生・協働推進課
TEL：045-620-0011
FAX：045-620-0025

日本から持参した点字ブロックを使用した視覚障害者の体験ワークショップ

写真提供：（特活）イランの障害者を支援するミントの会（助成事業から）

神奈川国際学生会館だより　留学生の日常

両会館では日ごろ、常駐する管理人と日本人チューターや職員などが一体となって、館内が大きな「わが家」になるようにこころがけています。今号では、ある夏の日に白根会館の談話室に集まってきた入居留学生の姿を通じて、現代留学生の「今」を感じ取っていただければ、と思います。

この日、朝からふらりとやってきたのはCさん。好奇心旺盛な明るい女子学生です。談話室に入って来るなり、今日のお昼のことを聞いてきました。「お昼何食べますか。お弁当ありますか。」まだ買っていないと答えると「じゃあ、なんか作ってきますね」と言って部屋に帰っていきました。お昼に現れた彼女が持っていたのはカレー。食べてみると、スパイス強めのエスニックチキンカレーといった趣です。同じカレーでも、国や文化によってずいぶん違うんですね。

午後になると、パソコン好きのY君、小柄で人なつっこいKさん、活動的なH君という三人が現われました。三人で夏休みの計画を立てています。「サーフィンしない？」「難しいよ。ね、プールにしよ？」「でも、僕水着ないよ」「近くに安い店があるから、そこで買えばいいよ」ということで、近くの公営プールに後日行くことになったようです。安くて楽しいことが、選択の基準らしいです。

夕方、再びCさんが現れ、会館一活発で明るいGさんもバイトから帰ってきました。みんなでワイワイ話が始まりました。するとY君が「今日、僕誕生日なんだ」とつぶやきます。「え？」「ほんと？」「じゃあ、お祝いしようよ！」と話がすぐにまとまり、みんなで誕生パーティーをすることになりました。Y君の好きな料理を聞いてみると「日本にはありません」とのこと。彼の好物はSATAYという、鶏・羊・水牛などの肉を串に刺して焼き、辛いピーナツソースをつけて食べる焼き鳥風肉料理だそうです。日本ではあまり見かけませんね。食文化の多様性を感じます。結局、各自が手料理を持ち寄り、それをみんなでつつきながら楽しいおしゃべりが続きました。

そのうち話題は学生らしく勉強の方向性や将来のことへと進みました。「絶対に大学院にいって博士号を取りたい」「人工知能の研究をしたい」「安い国立大学に行きたい」「来期も奨学金をしっかり取りたい」などの話に加えて、「ゆったりとした時間を過ごしたいので、私は自分の喫茶店を持ちたいんです」という声もありました。夢も人それぞれ。その夢に向かって一歩一歩進んでいる学生を見ると、なんだか嬉しくなります。

夜も更けたので解散です。明日はバイトの人、友達と会う人、家でごろごろする人など、これまた人それぞれでした。

県内ＮＥＷＳ　～秋はイベント目白押し！～　神奈川県内の多文化共生に触れるイベントをご紹介します！

■多文化フェスタみぞのくち2012
○と　き：10月20日（土）10:30～15:00
○場　所：川崎市高津区NOCTY2屋上・高津市民館11階、12階
○内　容：多文化ステージ、各国料理屋台、展示などを通じて違いをアピールし互いを理解していきます。
○主　催：高津区多文化共生推進事業運営委員会/川崎市高津区役所
○問合せ：TEL :044-814-7603（高津市民館多文化担当）

■よこはま国際フェスタ2012
○と　き：10月20日(土)・21日（日）10：30～16：00
○場　所：象の鼻パーク（横浜市中区海岸通1丁目）
○内　容：様々な国の料理やフェアトレード品の販売を通して、参加団体の国際協力や国際交流を知ることができます。民族舞踊や民族楽器の演奏やワークショップ、フェスタ専用クルーズなどで異文化体験もできます。
○主　催：よこはま国際フェスタ2012プロジェクト
○問合せ：TEL:045-662-6350（同事務局：(特活）横浜NGO連絡会内）

■さがみはら国際交流フェスティバル
○と　き：10月21日(日）10:00～15:30(予定)
○場　所：さがみはら国際交流ラウンジ・神奈川国際学生会館・大野北公民館（JR淵野辺駅下車）
○内　容：エスニック料理の屋台＆民芸品バザー、踊りなど各国の文化紹介を行います。
○主　催：さがみはら国際交流フェスティバル実行委員会
○問合せ：TEL :042-750-4150（さがみはら国際交流ラウンジ）

■「留学生と市民のつどい」
○と　き：10月21日(日）10:00～15:30
○場　所：神奈川国際学生会館・淵野辺（JR淵野辺駅下車）
○留学生による文化紹介や模擬店、地域のボランティアグループの方による日本文化体験　など。
○主　催：（公財）かながわ国際交流財団・神奈川国際学生会館
○問合せ：TEL :042-768-0211
＊上記の「さがみはら国際交流フェスティバル」の一部として参画しています。

■やまと世界料理の屋台村
○と　き：2012年10月28日（日）10：00～15：00
○場　所：大和駅東側プロムナード（小田急江ノ島線／相鉄線）
○内　容：世界70ヶ国、約6,000人の外国人が住む大和市で世界料理の屋台が登場します。タイ、韓国、トルコなどの料理の屋台のほか、大和B級グルメ王座決定戦Y-1グランプリ出店屋台が大和駅前に集結。ステージでは民族舞踊や民族音楽の披露もあります。
○主　催：大和市
○問合せ：TEL :046－260－5126（公益財団法人大和市国際化協会）

■かまくら国際フェスティバル2012
○と　き：10月28日（日）10:00～15:00
○場　所：高徳院（鎌倉大仏）
○内　容：「鎌倉市国際交流・協力団体連絡会」に参加する団体が、それぞれの団体紹介をはじめ、世界各国の民芸品や軽食販売などを通じ異文化理解を推進します。
○主　催：かまくら国際交流フェスティバル2012実行委員会・鎌倉市
○問合せ：TEL:0467-23-3000（内線）2211（鎌倉市秘書広報課）

■第6回ひらつかワールドフェア＆スイング・ブラジル10周年記念
○と　き：10月28日（日）10:00～15:30 少雨決行、荒天中止
○場　所：紅谷町まちかど広場（平塚市紅谷町12－21）
○内　容：主に外国籍市民主体による母国文化紹介イベント、各国の食べ物や民芸品の販売、民族衣装のファッションショー　など
○主　催：平塚市通訳・翻訳ボランティアバンク
○問合せ：TEL:0463－25－2520（平塚市文化・交流課）

■ふじさわ国際交流フェスティバル
○と　き：11月11日（日）11:00～15:00
○場　所：藤沢駅北口サンパール広場
○内　容：世界の料理や民芸品の販売、国際交流や国際貢献活動の紹介を行うテントと、民族音楽伝統舞踊などの紹介ステージ　など
○主　催：ふじさわ国際交流フェスティバル実行委員会
○問合せ：TEL 0466-25-1111（内線）2161（藤沢市国際課）

KIF INFORMATION

かながわ国際交流財団へのご寄付のお願い

当財団では中期的な重点目標に掲げた『持続可能な多文化共生の地域社会かながわの基盤づくり』の取組みを着実に進めるため、寄付者の皆様に寄付金の使途を次の４つの事業から指定して頂く新たな寄付制度を設けております。これまで同様、当財団へのご厚意を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

① 「多文化共生の地域社会かながわづくり」
② 「県民・NGO等との連携・協働による国際活動の促進」
③ 「国際性豊かな人材の育成」
④ 「学術・文化交流を通じた地域からの将来像の提案」

振込先：ゆうちょ銀行　00280-4-49894
公益財団法人かながわ国際交流財団
通信欄にご希望の事業名または事業の番号（①～④）をご記入ください。

当財団は、本年４月１日に公益財団法人へ移行しましたので、これに伴い、税制上の優遇措置が受けられます。詳しくは国税庁ホームページをご覧ください。
国税庁ホームページ
○タックスアンサーNo.1150 一定の寄附金を支払ったとき（寄附金控除）
http://www.nta.go.jp/taxanswer/shotoku/1150.htm
○タックスアンサーNo.5283　特定公益増進法人に対する寄附金
http://www.nta.go.jp/taxanswer/hojin/5283.htm

賛助会員募集のご案内

当財団の活動を支援してくださる賛助会員を募集しています。多文化共生の地域社会かながわづくりなど幅広い活動をしている当財団をぜひご支援ください。

●会員の皆様へのサービス
・本誌を定期的にお送りします
・当財団の出版物の割引サービス
・提携しているエスニック・レストランの優待サービス　等
（会員サービス情報提供URL：http://www.k-i-a.or.jp/member）

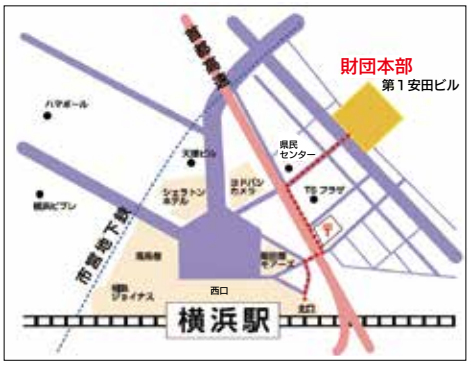
●会　費
①学生会員1,500円以上　②一般会員3,000円以上　③団体会員10,000円以上（会員の有効期限は１年間です。期限を過ぎて６か月間会費の支払いがなければ自動退会となります）

●申込み・問合せ
次のホームページから申し込むか、財団事務所にお電話をください。
申込用ホームページ：https://secreg.jp/sr/k-i-a.jp/form/NDU1
TEL: 045-620-0011

かながわ国際交流財団（略称ＫＩＦ）は…

地球のすべての人が、国境や人種、文化の違いをこえて、いきいきと心豊かに暮らせる社会の実現のため、次の４つを柱として、事業を展開しています。
１　多文化共生の地域社会かながわづくり
２　県民等の国際活動の支援、ＮＧＯ等との連携・協働の促進
３　地球規模の課題等に対応できる国際性豊かな人材の育成
４　学術・文化交流を通じ、地球規模の課題解決に向けた地域からの将来像の提案

財団本部（多文化共生・NGO協働推進センター）



湘南国際村学術研究センター

広告を掲載しませんか？

本誌は、国際協力・国際交流の活動をしている市民グループをはじめ、図書館、公民館、パスポートセンター、県内の高校、市町村の国際担当部署、教育委員会、区役所、県庁、財団賛助会員の皆様などに配布しています。
発行部数：5,000部
掲載に関する情報は次のホームページか、お電話で
http://www.k-i-a.or.jp/ad/

公益財団法人 かながわ国際交流財団
Kanagawa International Foundation
ニュースレター『KIF NEWS』　2012年9月15日発行　第30号
発　行／公益財団法人かながわ国際交流財団
［財　団　本　部］〒221-0835　横浜市神奈川区鶴屋町2-21-8 第一安田ビル4階　TEL：045-620-0011　FAX：045-620-0025　http://www.k-i-a.or.jp/　E-mail:tabunka@k-i-a.or.jp
［湘南国際村学術研究センター］〒240-0198　三浦郡葉山町上山口1560-39 湘南国際村センター内　TEL：046-855-1820～1822　FAX：046-858-1210
［神奈川国際学生会館・淵野辺］〒252-0233　相模原市中央区鹿沼台1-10-22　TEL：042-768-0211　FAX：042-768-0213
［神奈川国際学生会館・白根］〒241-0005　横浜市旭区白根4-24-3　TEL：045-953-7001　FAX：045-953-7001
印刷・DTP／有限会社　青史堂印刷

＊情報誌に掲載されているイベントへのお申し込みの際にお知らせいただいた個人情報は、イベント受付以外の目的には使用いたしません。